

## 『藏漢対照拉薩口語詞典』

(于道泉主編 民族出版社 北京 1983 刊) について

西田 龍雄

1. 中国では近年少数民族言語の研究が益々盛んになり、各言語の辞書の編纂にも大きい努力が払われている。チベット語の辞書もすでに多種類が刊行され、格西曲札『藏文辞典』の漢訳本(1981. 第2次印刷, 北京民族出版社〔格西〕と略称)はじめ、『藏漢詞典』西北民族学院藏文教研組編(蘭州, 甘肅人民出版社 1979〔甘肅〕と略称), 『藏漢対照常用語彙』西藏民族学院預科藏文教研組編(成都, 四川民族出版社 1980〔四川〕と略称)といった代表的な辞書は多くのチベット語研究者に愛用され、大いに役立っている。

また五万語以上を収録する大型の双解辞典『藏漢大辞典』の編纂が鋭意進められていることも周知の事実である。その辞典の「征求意见稿」はすでに書物の形をとっていて、筆者も大型本三冊からなる実物を中央民族学院の図書館はじめ数ヶ所で見かけたことがある。「征求意见稿」とは、言うまでもなく研究者の意見を広い範囲で聞き、必要な修正を行うための稿本である。整った印刷本ではあるが内部資料で、おそらく国外には一本も出されていないと思われる。この大辞典の刊行にはよほど慎重を期しているのか、征求意见稿が1979年に世に出てからすでに6年を経ているが、まだ正式出版がなされていない。主編者であった張怡蓀教授は1928年にその編纂を志され、心血をそそがれたが、一昨年(1983)成都で病を得て逝去されたと聞いている。副主編者の祝維翰先生もすでに世を去られ、協力されたチベットの学者羅桑圖班、羅桑多吉両先生も60年か70年代に物故しておられる。

『藏漢大辞典』は、チベット語辞典として、古籍中の文語語彙や解放後の新造術語などのほか、とくに実地調査によって集めた藏族民間の農牧業手工業など生産技術と生活習俗に関する語彙を豊富に盛り込んだだけでなく、事典として、いわば「チベット小百科事典」として役立つよう意図されたものと伝えられる。その完成はチベット研究に大きく貢献するに違いない。

2. ここに紹介する『拉薩口語詞典』(「口語」と略称)は、その表題が示すように、純然たる口語辞典として企画されたもので、ラサの話し言葉を核にして収録した有

用な現代語辞典である。しかし、あとで述べるように、たぶん口語とは認めにくい小事典的な項目もなぜか少なからず含まれる。やはり上述の『藏漢大辞典』の存在を意識したためであろうか。

昨年3月、筆者が北京を訪れた折、本書は刊行されたばかりの様子で、主編者の于道泉教授から一本を頂戴した。いままでにない画期的なチベット語辞典である。もし日本でチベット口語辞典を編纂するとすれば、どうしても本書を基本としなければならないであろう。むしろその編纂に先立って、まずこの辞典の日本語版を作成することを望みたい。

しかしこの辞書も簡単にでき上がったわけではない。何度も改訂増加を重ねて来ている。本書の跋によると、第一次油印本(騰写版)が『藏漢拉薩口語詞彙』(藏漢対照, ラサ口語音により排列)として、1954年9月に発表(1万1千語ほど収録)、第二次油印本は、『藏漢口語詞彙』(拉薩方言)(藏漢対照, チベット文字順に排列)として1957年6月に(1万2千語ほど収録)、第三次油印本は、『藏漢口語詞典』(藏漢対照, ラサ口語音とチベット文字順をおり交えて排列)として、1960年2月に(1万5千語ほど収録)刊行されたらしい(いずれも内部資料で未見)。編集に協力したのは格桑居晃、洛桑群覚、且增晋美、徐盛、周季文の諸氏と中央民族学院民語系藏語教研組の同志である。1978年6月に、停頓していた編集が再開され、大幅に改訂増補されて、本書が完成した。

凡例によると、藏文正字を見出しにしたが、口語を反映した綴字も使って、はじめて文字を知った藏族の読者が、口語からも藏文正字を知り得るよう配慮し、また正字のない口語形式にも、チベット文字による書き方を考えてみたとある。口語の文字化につとめていることがわかる。

3. まず、筆者が気付いた本辞典の特徴をまとめて例挙する。

1) ラサ口語の発音に対して新しいラテン字拼音法が考案され、各語彙項目に声調表記を含めたラサ口語形的確に示されている。

- 2) 収録語彙数が2万9千語に及び、他の辞典にはない新しい項目が多量に含まれている。
- 3) 単語だけではなく、単独には使わない文法形態素も収録され、必要な文法情報が与えられている。
- 4) 各項目の意味の説明が丁寧で、具体的な指示がある。
- 5) 固有名詞（人物名、地名、寺名など）が多く収録され、正確な読み方がわかる。
- 6) 古い時代の制度・風俗・習慣を代表する語彙も収録され、一々説明がつき理解しやすい。
- 7) 諺も収められている。

4. まず、ラサロ語音について述べてみよう。凡例によると、ラサの常用音を主体とし、それ以外の発音は括弧に入れて示したとある。たとえば spras 装飾は [pe:51] とも発音するし、[tɕe:51] ともよむ。前者が常用音であるから、baeh (zhaeh) のように示される。（綴字のローマ字転写は筆者の方法による。以下同じ。）

このラサ音表示に使われる「拉丁注音」は多少厄介であるが、避けることができないので、簡単に説明しておきたい。基本的には漢語（普通話）の「拼音方案」を基にして作られている。

表音ローマ字	発音	表音ローマ字	発音	表音ローマ字	発音	表音ローマ字	発音
b	[p]	d	[t]	g	[k]	*gy	[ç]
p	[pʰ]	t	[tʰ]	k	[kʰ]	*ky	[çʰ]
z	[ts]	zh	[tʂ]	j	[tɕ]		
c	[tsʰ]	ch	[tʂʰ]	q	[tɕʰ]		
m	[m]	n	[n]	*ny	[n]	*ng	[ŋ]
l	[l]	*lh	[lʰ]	sh	[ʂ]	x	[ç]
*hy	[ç]	f	[f]	s	[s]	r	[r]
w	[w]	y	[j]				

(\*印は漢語拼音方案には欠けるもの。)

ラサ方言の子音を29単位と認め、漢語拼音方案にはない ky-(綴字の khy-gy-etc. にあたる), gy-(ky-dgy-etc. にあたる), ny-(ny-, my-, gny-etc. にあたる), ng-(dng-ng-mng-etc. にあたる), lh-(lh- に), hy-(hy- に)を補っている。

(金鵬『藏語簡志』などでは f は認められていない。漢語からの借用語のみにあられる f は h と ph を上下に組み合わせて表記する) 張琨や Goldstein の表記では、k は [ç], q は [k] を代表するから、この表記法とは逆さになりまぎらわしいが、漢語を学習している者には、この方が記憶しやすい。

母音は11母音と考え、ii [i:] ee [e:] aa [a:] acc [ə:] oo [o:] uu [u:] ae [ɛ:] oe [ø:] ue [y:] と ie [ɪ:] uo [u:]

で表記する。[ə:] を acc とする奇抜な方法が採用されている。この中、短母音となるのは i [i] e [e] a [a] ac [ə] o [o] u [u] の6母音とし、iu [iu] eu [eu] acu [əu] ao [ao] と ua [ua] ei [ei] io [io] の7種の複母音を認める。-ae [ɛ:] は綴字 -al -ahi -ad -as にあたり、-oe [ø:] は -ohi, -ol, -od, -os に、-ue [y:] は -uhi, -ul, -ud, -us に、-ac [ə] は -ab -abs に該当する。ie [ɪ:] と -uo [u:] は、第2音節の -ba が第一音節と合一した結果出てくる形である。たとえば lji-ba/jierw 重い, phyi-ba/qieh おそい, du-ba/tuov 煙のように(斜線より右側の形はラサ音表記をあらわす。音節末尾の -w -h -v は声調表示)。

声調は上掲例からわかるように音節の最後に、f, v, h, w (いずれもイタリック体)をつけて示している。基本的には f 高平調と v 低昇調の対立で、綴字に -g -d -b -s と再添後字 -s がある場合、高平調は高降調 (h) に、低昇調は低昇降調 (w) になると解釈する。

声調型	近似する漢語の声調	例
高調	f 高平調 55	陰平 rta/daf 馬
	h 高降調 51	去声 stag/dah 虎
低調	v 低昇調 13	上声 lo/lov 年
	w 低昇降調 132	—— lug/luw 綿羊
無標	輕声	輕声

2音節単語に適用されるつぎのような変調規則も指摘されている。

- 1) 2音節単語では、第一音節にある高降調 (h) は、高平調 (f) に変わり、低昇降調 (w) は低昇調 (v) になる。

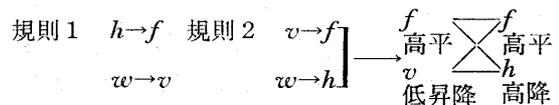
stag tshang/dagf cangf 虎の穴  
lug sha /lugv xacf 羊の肉

- 2) 2音節単語では、第2音節にある低昇調 (v) は高平調 (f) に、低昇降調 (w) は高降調 (h) になる。

rdo zam/dovsamf 石橋  
zla hod /dav oeh 日光

したがって、1の規則と2の規則によって、ラサ方言の2音節単語の声調は4通りの組み合わせに限定されることになる。

CVC(1)——CVC(2)



子音音素の変音には、つぎの規則をあげている。

- 1) 低調の出気音は、第2音節では無気音となる。bu/puv 子供 ma bu/macv buf 母子

- 2) 第2音節の -ba は、第一音節に語末子音がない場合、ときに -waf と読むほかは、つねに先行の末尾子音と同化される。

dang-po/tangv gof 第一 zor-ba/soov raf 鎌

- 3) hy- hr- lh- は第2音節では有声音化して、y- r- l- となる。hyang-hyang/hyangf yangf 軽やかで活発 hrang-hrang/shangf rangf 単独で

- 4) 否定詞 ma- は高平調出気音の前で、いつも無声音化し mhaf [ma 55] となる。

ma phyin/mhacf qinh 行かなかった

この現象は、以前筆者も Tsultim 氏のチベット語を観察していて気付いたが、この辞典では各形式に mhac [mɔ] ~ [mɔ] の表記が与えられている。

- 5) brngos/ngoeh <十分に炒めた>(過去形)をラサ人で ngoeh [ŋɕ 51] と読む人がいる。これは [ŋɕ 51] の誤植であろう。Goldstein は /ŋö/ として有声、瞿霽堂氏の『阿里藏語』に記されるラサ音でも [ŋɕ 53] とする(現 [ŋɔ 53], 命 [ŋɕ 53])。金鵬氏の『藏語簡志』では、過去 [ŋɕ 53], 現 [ŋɔ 53], 命 [ŋɕ 53] (p. 186) でいずれも有声鼻音である。瞿氏と金鵬氏は、綴字 -os にあたる形を声門閉鎖をともなった -ɔ<sup>ʔ</sup> で表記するのは、この辞典の形式と一致せず気になる。

- 6) 綴字の g- j- d- b- dz- を無声無気音に発音するラサ人もいる。

このローマ字表記法はよく検討されていて、今後の中国の出版物、とくに中央民族学院関係の出版物で使われると思えるから、日本の研究者も習得しておく必要がある。すでに簡便な入門書『藏文拼音教材(拉薩音)』(Bod yig-gi sgra sbyor slob deb (lhasahi skad) 中央民族学院少数民族語言文字系藏語文教研室編 民族出版社 北京 1983) が刊行されており、十九課に分けて、正字法とラサ音の対応を詳しく説明している。

声調をローマ字で音節末尾につける方法は、ほかの少数民族言語に対しても適用されているが、慣れるまで大へん煩わしく、また拼音法の約束を十分知らない人が声調符号までローマ字通り読んでしまう恐れがあるため、必ずしも賢明な方法とは言えない。

5. 辞書を編纂するにあたって重要な視点はいろいろとあるけれども、まず単語の連続をどの範囲まで項目として取り上げるか、そして全体を体系化された語彙の集合と考えるとき、単語相互の関係をどの程度に示すかは、最も基本的な問題となろう。

ごく簡単な例でこの問題を見てみよう。チベットにつきの諺がある。(これは本辞典には収録されていないが、『藏族諺語』(成都 1980) からとった)

drang-po bshad-na mi mi dgah  
rgyug-pa khyer-na khyi mi dgah  
本当のところを言うと人は喜ばず  
棍棒をとると犬は喜ばず

〔四川〕には drang-po 誠実, 老实は項目として選ばれているが drang-po bshad-na はない。〔格西〕にもその形はないが, drang-por smra-ba 老实説, 直説, 不欺詐はある。後者はかなり文語的な表現であるためか〔口語〕には入っていない。しかし,〔口語〕には drang-po bshad 老实説と drang-po bshad-na 老实説, 平心而論の両方共に独立の項目として収められている。利用者に対して, 非常に親切である。

筆者の手許に西藏自治区の全日制初級中学校で漢語を学習するために使われている教科書『漢語文』(拉薩 1984) がある。内容の一部に漢語と蔵語の対照があるが, その第二冊に (p. 23), 漢語の一方面…… 一方面にチベット語の gcig-nas…… gnyis-nas があたることが例示されている。その項目は,〔格西〕にも,〔甘肅〕にも〔四川〕にもないが, この〔口語〕にはある。しかし, 一方で, 同じ教科書に (p. 31) 怎祥(才能)……呢? の例があって「どうすれば小学教育の質を向上させ得るだろうか」にあたるチベット文は, gang- hdra byas-na ……red- dam? となっている。〔口語〕をみると, gang-hdra/kacnv zhaeh 怎樣, 什麼, 如何は独立項目とするが, gang-hdra byas-na までは採用していない。これは辞典の規模と関連する問題である。具体的な例をもう一つ追加してみよう。

「山頂に近づけば近づく程, 気候は寒くなり, 空気も稀薄になって, 呼吸もますます困難になる」越近山頂, 気候越冷, 空気越稀薄, 呼吸越困難にチベット文, ri-rtse dang ji-tsam gyis thag-nye ru hgro skabs de-tsam gyis gnam-gshis grang-ba-dang/de-tsam-gyis ahng rlung nyung-ba/de-tsam-gyis dbugs-rngub gtong khag-pa bcas yod-pa-red. が対照される (p. 43) これはかなり書き言葉的表現と思えるが, たとえば〔甘肅〕に ji-tsam〔副〕 1. 如何; 怎樣 2. 若干; 多少と de-tsam〔副〕 僅那些, 僅那樣的項目はあるけれども, このような文中で相照応する語句の使い方はどの辞書にも示されていない。

6. 一方この〔口語〕には, 話し言葉に見られる文法的な形態素の用法がかなり多く取り上げられている。

kag<sup>v</sup> (右肩の印は, 単独では使えない形態素を指す)/gah 文中で2つの自主動詞(制御可能動詞)\* の間に使う。「先行する動詞の表現する動作があとの動詞の目的であることを示す」.-kag- に先行する動詞は必ず自主

動詞の現在形であること。例 *kho dpe-cha nyo-kag phyin-song* 彼は本を買って出掛けていった。

*kag-byed*<sup>▽</sup>/*gah qew*, *khag-byed* と綴る。「動詞の現在形と自由に結合でき、自主動詞につくときは‘むりに’の意味を、不自主動詞(制御不能動詞)に結合すると‘…のふりをする’の意味をあらわす」例, *na-kag-byed* 病気のふりをする。 *shod-kag-byed* むりに話をする。「…のふりをする」には別の項目に *-tshul-byed*<sup>▽</sup>/*cuef qew* がある。これは動詞現在形のあとにつける。 *smyo-tshul-byas* 狂気を装う。 *dpe-cha lta-tshul-byas* 本を読んでいるふりをする。「むりに…」には *-la ma*<sup>▽</sup>/*lamav* (*maf*) がある。同じ自主動詞現在形を *la-ma* の前と後に置く。例, *gzhas gtong la-ma gtong* しぶしぶ歌う *yi-ge hbri-la-ma hbri* しぶしぶ書く。もし同じ不自主動詞を前と後に置くと‘半分…で…でない’の意味をもつ。例, *shes-la-ma-shes* ‘わかったようでわからない’ *mgo-tshod-la-ma tshod*, 理解したようで理解できない’。

▽ 印のついた形態素の面白い使い方がいろいろと示されている。

*nyes-shor*<sup>▽</sup>/*nyeh xoof* 自主動詞現在形と結びついて‘すべきでないことをしてしまった, しまった。’の意味をあらわす。例, *lto chas de za-nyes-shor song* ‘こんなもんを食うてしもうた, えらいこっちゃ’

〔四川〕によると *da* には, 1. 現在, 2. 強調をあらわす語気助詞とある。この強調とは何の強調なのか全く指示がない。〔口語〕をみると, *da* ①/*ta*<sup>▽</sup>/*da* 当然(もちろん)の訳がついている。まず①の意味と②の意味は発音が同じでないことがわかる。後者の意味は, 同じ動詞(現在形)を *da* の前後に置いて作られる。例, *hgro da hgro* もちろん行か, *yin da yin* もちろんそうだ。そのほかに③の用法もあがっている。/*da*…命令のあとにつける。例, *lto* *da* 見よ! *nyon-da* 聴け!

それぞれの文法形式に動詞のどの形式(過去現在など)が使われるかを指示した文法情報は, 重要である。

7. さきにあげた第2の問題, 語彙の階層の指示はかなり困難な作業がつきまとう。たとえば *pho-rog gis mig-rko* 「からすが目をつつく」という諺がある。この *pho-rog* 鳥は〔口語〕では, /*bof roh* (*of roh*) 烏鴉, 寒鴉, 大老鴉と訳されている。すると同じ鳥の *khwa-ta* とどのように違うのか, 後者は /*kaf daf* 烏鴉, 老鴉と訳される。〔格西〕をみると, *pho-rog*=*bya-rog* 烏鴉, 大鴉(*bya-rog*の形は〔口語〕にはない)とあり, *khwa-ta* には *bya-rog chung-ba* 鴉, 小烏鴉の訳語がついて

いる。この段階で *khwa-ta* が小さい鳥で, *pho-rog* は大きい鳥であることがわかる。念のため青海の『新編藏文字典』(1979 青海民族出版社)の *pho-rog* の項目をみると, *mdo dbus mtho sgang-na yod-pahi bya nag-po khwa-ta-las cung-zad che-ba zhig-gi ming-ste, bya-rog kyang zer.* とあった(下線は筆者)。*khwa-ta* より少しばかり大きいのが *pho-rog* であって, さきに見た両者の関係はこの記述から支持される。幸い, この2種の鳥の動物学上の違いは, 『青蔵高原薬物圖鑑』第三冊(青海省生物研究所, 同仁県隆務衛生所編, 青海人民出版社 西寧 1975)によって詳しく知ることができた。*khwa-ta* は, 大嘴烏鴉(学名略)別名 烏鴉, 老鴉, *bya-rog* は渡鴉(学名略)別名 老鴉とあるから, 各辞典いずれもこの訳語に改めた方がよさそうである。両者を大小の違いでとらえるのは簡便な目安にすぎないことがはっきりする。図解辞典は有難いもので, 詳しい記述のほかに, 図が入っていると何となくわかったような気がする。薬としてはいずれも肉の部分を使い, 精神病の治療に効用があるらしい。ただし前者は「常用中品」に, 後者は「少用下品」にランキングされている。

8. 以前多田等観先生から伺った話であるが, 昔チベットの僧侶が日本に来られた折, ぐるりで「チャビン」「チャビン」とお呼びしていたが, 僧侶は自分のことを指していると気付かれた。先生はその理由を尋ねたところ, 「チベットで「チャビン」は茶瓶で禿頭のことだが, わしの頭をいっとるのじゃろ」と言われたらしい。この単語がラサ口語であるのかと〔口語〕で調べたが見当らない。その替り「ヤカン頭」はあった。

*zang khog/sangv koh* 銅罐, 銅鍋

*zang khog mgo/sangv koh gov* 禿頂, 禿頭, 禿子(蔑称)

これは言うまでもなく頭の形から葉罐を類推した換喩である。〔四川〕には両方あがっているが, 〔格西〕〔甘肅〕には双方共ない。やはり口語の形なのだろう。〔口語〕のみにあって, ほかの辞書には見当らない単語は, 新造語も含めて少なくない。

*gdan-so/daenf sof* 永久齒 *ten-tsi pho/denf zif pof* 正電子, 陽電子 *ten-tsi mo/denf zif mov* 負電子, 陰電子。あとの二つは漢語, 電子の借用形に陽-*pho*; 陰-*mo* を結び付けた形である。〔口語〕 *lto byed/dof qew* 吃飯は〔四川〕に *lto-byas-pa* (他) 吃飯として収録されるが, 日本語の「はらごしらえ」に相応して, 造語法が面白い。

9. つぎに〔口語〕に与えられた説明によって, 単語の意味がよく理解できる例をあげてみよう。

〔格西〕〔甘肅〕にはないが、〔四川〕には *kha-hdres-pa* 接触 (する) (多くは共同に食器を使うことを指す) がある。この説明のみでは実際の意味は把握し難い。この〔口語〕をみると、*/kaf zherw* 〈不自主〉食器を混用すること (蔵族には、御飯を食べるとき酥油茶を飲むときには、必ず自分特定の食器を使って、(他人と)互用または共用してはならない習慣がある)。この解説によって、単語の意味はよく了解できる。

また *zhag* には〔四川〕で浮油の訳がある。この訳語だけでは、浮いた油としかとれない。〔口語〕では、*/xaw* 浮油 (酥油茶の上に浮いた油) とあり、はじめてその実体が理解できる。その油を「すくい上げる」のは、*zhog len/xaw lenv* 撇浮油 (酥油茶) のように、*len* 〈取る〉を使うことも別項目で示されている。

*tshe lhag* には〔四川〕で残年、〔甘肅〕では残年、余生と漢訳されるが、〔口語〕で */cef lah* 余寿 (子供が早死にすると、(その子が) 生きた時間は、その人が前世で残して来た寿命であったと迷信する) と解説されているのを知って、はじめて他の辞典で残年、余生といっている本当の意味が了解できるのである。

10. また古い風俗習慣に関して、今の段階では他の辞書には全く見られない有用な情報をこの〔口語〕は提供している。

*bkra-shis sgor-mo/zhac f xih goov mof* 炸果子 (油で揚げた果物) (酥油 (乳油) で揚げた食物で、旧チベット政府が慶祝典礼を行う際、官職の位に応じて違った数 (の炸果子) を僧俗官吏に与えた)

*brgyad gtor/gyaev dor f* 傑朵 (毎年蔵曆三月八日に、旧チベット政府の役人は夏の服装に替換えるが、あわせて宗教活動を行い、供物を供えて四方の護法神を祭った。その活動を傑朵<sup>キエト</sup>と言う)。

*thon ja gtong/toenf ja f dang f (dong f)* 〈動〉卒業 (茶会) に接待する (旧チベット社会で学生が卒業する時、茶会を催し、老師と級友を招待して、その上老師、班長、先輩にお金を送ることを指す)

以上少数の例を紹介するとどまったが、この『拉薩口語詞典』には、尽きない面白味が含まれている。

\* 金鵬は『蔵語簡志』の中で、自主動詞と不自主動詞の違いを、行為を主観で決定できるか否かに置いている。ta 53 ‘見る’, *tshe* 55 ‘探す’ は自主動詞で、*thong* 55 ‘見える’, *ni*<sup>2</sup> 53 ‘見つかる’, は不自主動詞とする (p. 34)。不自主動詞 ‘落ちる’ と自主動詞 ‘降りる’ の対立を考えると、両者の違いは理解し易い。

○大会記事 第32回大会は、昭和59年11月17日(土)、大正大学巣鴨校舎で開催され、次の研究発表が行われた。

福田洋一 (東京大学) 意識と存在の問題事象への試論

大村誠司 (駒沢大学) チベット佛教における *Pramāṇavārttika* 現量章に関する解釈

原田 覚 (東方学院) *Lam rim chen mo* の中観帰謬派思想

長野泰彦 (国立民族学博物館) 嘉戎語の能格性

金子英一 (大正大学) サムエの現状

大会の当日の総会において次の事項が承認決定された。

1) 日本学術会議の第13期の会員の推薦に当たる推薦人として、当学会から北村 甫氏 (第1候補)、長尾雅人氏 (第2候補) を届け出る。

2) 「日本西藏学会名簿」の「役員」の欄を「役員・顧問」とし、委員伊原照蓮氏 (九州大学) を (成田山仏教研究所) に変更、新たに戸崎宏正氏 (九州大学) に委員を委嘱する。

3) 会報31号の編集委員を北村甫 (言語)、山口瑞鳳 (歴

史)、袴谷憲昭 (宗教) の三氏に依頼する。

4) 会報31号は、第32回大会の発表者5氏の上記発表の要旨と、西田龍雄氏の于道泉主編「蔵漢対照拉薩口語詞典」(1983) の書評を掲載する。

5) 会報31号から、大会記事に総会で承認された当該年度の会計報告を掲載する。

6) 昭和60年度大会 (第33回) を名古屋大学で開催する。

7) 昭和58年度会計報告

収入:

前年度繰越金	256,711円
会費	407,000
バックナンバー売上金	1,000
預金利息	3,606
合計	668,317

支出:

会報30号印刷費	155,000円
同 発送費	33,960
事務連絡費	54,860
事務補助者謝金	28,000
合計	271,820

昭和59年度への繰越金: 396,497円